

オットー・グロース伝 (1)

フロイト, ユング, フリーダ・ロレンスとの関係

倉持 三郎

(平成10年9月30日受理)

A Biography of Otto Gross: Part 1

The Relation with Freud, Jung, Frieda Lawrence

Saburo KURAMOCHI

(Received on September 30, 1998)

序

D.H.ロレンス(Lawrence, 1885~1930)の思想の流れを辿ると、そのひとつは、ドイツとつながっている。まず、妻、フリーダはドイツ生まれであることが、ひとつの理由であるが、その背後にいた、オットー・グロース(Otto Gross, 1877~1920)の存在がきわめて重要な働きをしている。ロレンスの思想、文学を考える場合、グロースの存在めきには考えられない。その意味で、これまで、グロースについて調べ、発表してきたのであるが、さらに、これまでに触れなかった点について書きたい¹⁾。

1 脳精神医学者としてのグロース

グロースの活動を3期に分けることができる。第1期は、脳精神医学者としての活動の時期、第2期は、フロイトの精神分析学の影響を受けた時期、第3期は、社会体制批判の文筆活動をした時期である²⁾。

グロースは、1897年から1900年にかけて、グラーツ、ミュンヘン、シュトラスブルグの各大学で医学を学んだ。そのあと、グラーツ、ミュンヘン、フランクフルト、キールの各大学で、インターンとして研修した。1899年、グラーツ大学で博士号を取得した。1901年から1902年に、ミュンヘンのグデン病院と、グラーツのガブリエル・アントン病院に、精神科の無給の見習い助手として勤務した。

グロースの精神医学の研究者としての活動は、当時の

学問の流れに应じるものである。はじめ、脳精神医学から出発し、のちに精神分析学に移っていった過程は、精神医学の流れにそうものである。

精神医としてのグロースの出発点は、脳精神医学であるが、これは、当時のドイツの精神医学界の動きに相応じるものであった。彼に一番影響をあたえた学者はヴェルニッケ(1848~1905)である。

精神病の原因については、古来、種々の説があるが、19世紀の前半のドイツにおいては、精神病の心理因説をとる、ロマン主義精神医学が力を得ていた。これは、人間の個性や感情生活を謳歌するロマン主義と相通じるものであり、精神障害は、邪悪な行為や罪、反倫理的行為や反宗教的行為によって生じるとされた。

精神障害の原因として、心理説とともに従来から言われているのは、脳の障害説である。ロマン主義の影響を受けて心理説がややもすれば、思弁に傾くのにたいしてヤコビのように、精神障害の心理因説に強く反対して、科学的精神医学のもと、脳の器質的变化の存在を想定する器質論者が現れた。この流れは精神障害を脳の変化で説明することから脳精神医学派とよばれる。

グリーゼンガーは、精神機能は脳の異なる部位に存在することを主張し、また、神経解剖学の領域でも優れた業績をあげた骨相学者のガルの影響を強く受け、精神の病は脳の病気であるというスローガン掲げて、グリーゼンガーは脳の構造や、機能の変化を物質的に解明することが精神障害の原因追求に至る最良の道であることを主張した³⁾。

ヴェルニッケは脳局在論者として失語症に関心を抱いて感覚性失語、また硫酸誤飲による脳症を発見した。グ

ロースが関心をもったのは、ヴェルニッケの『精神医学概要』(1894~96)に述べられた、分離仮説である。脳皮質と、神経繊維の機能面での分離によって、ある種の精神障害がおこるとしたものである。

グロースも最初は、ヴェルニッケの方法によって研究をすすめる、この分離仮説をとりあげ、その仮説をもとにして、論文、「脳の二次機能」を発表した。しかし、彼は、器質論の枠のなかにとどまることができなかった。

2 精神分析学へ向かう

脳精神医学が盛んになる一方では、心理因説も続いていた。精神障害の治療が心理的操作でおこなわれ、成功した。その端緒がメスマルである。正統な学会からは、まやかしと言われながらも、彼は動物磁気説をもとに治療した。リエボーは、催眠療法を治療に導入した。シャルコーは、ヒステリーの治療に催眠療法を用いた。

シャルコーの弟子のなかで最も著名な精神科医は、精神分析療法を発見し、精神障害の治療に応用したジクムント・フロイト(1856~1939)である。とくに神経症やヒステリーの病因を心理的なものに求め、あるいは、自我の発達過程における歪みや性体験の異常にもとめ、さらには無意識の役割を強調して、治療に精神分析という手法を創出した⁴⁾。

グロースは、文献を広く読み、当時のあたらしい研究を取り入れることに敏感であった。フロイトの初期の業績を、1902年には確実に知った。その結果、1901~4年の論文において、脳精神医学と精神分析を結びつける試みをはじめた。そして次第に精神分析学へと接近した。フロイトもまた、前述の器質の損傷変化を基礎とした脳精神医学を批判することから出発した。

さまざまな失語症が、連合経路における皮質下の損傷と従来よばれてきたものによって説明するという考え、そのものを疑がう勇気を得た⁵⁾。

フロイトは、1895年にブロイエルとの共著で『ヒステリー研究』を出版した。このなかで、精神分析という言葉をはじめて使用した。さらに、1900年に、『夢の解釈』を公刊した。この年が、精神分析学がはじまった年となる。グロースがフロイトを知るのは、ちょうど、精神分析学が起ったときであった。したがってまだ、世間からは、冷たい目で見られていた時期であった。

そのなかで、フロイトの説に賛同するものが現れた。そのひとりが、イギリスのハヴェロック・エリスである。ハヴェロック・エリスは、アメリカの雑誌に論文を発表して、そのなかで『ヒステリー研究』のことを述べ、ヒステリーの病因が性にあるというフロイトの見解を認めた。1904年発行の『性の心理の研究』第1巻で、ハヴェロック・エリスは、フロイトの学説を「魅力的で、実に重要な研究」とした。

グロースも、また、フロイトの学説を支持した。『フロイトの生涯』でアーネスト・ジョーンズは、こう述べている。

しかし、1904年にはさらに進んだ二人の研究者が現れる。後に不幸にも精神分裂症になった天才、グラーツのオットー・グロス(グロース)が論文を発表して、フロイトの記述した思考の分裂と、早発性痴呆症の示す意識活動における分裂とを巧妙に対比し、その後きわめて独創的な書物を書いて、その中でフロイトのリビドー理論を、抑圧、象徴などの概念を含めて完全に認めた。グロス(グロース)は精神分析の実際において私(ジョーンズ)の最初の教師となった人であり、私は彼の行う治療にいつも立ち会った⁶⁾。

このようにして、当時のフロイトにとって、グロースは数少ない味方であった。1904年ころ、フロイトと面識をもつようになった。

また、チューリッヒのブルクヘルツリ精神病院の首席助手のC.G. ユング(1875-1961)がフロイト学説に興味を示した。ユングは、1900年にバーゼル大学を卒業後、この病院の精神科医であり、院長をしていた、オイゲン・ブロイラー(1857~1939)によって助手に採用された。

このことは、ユングにとって、極めて幸運であった。ブロイラーは精神分裂病という言葉を作った人で、ヨーロッパでは一流の精神科医であったが、ユングの才能を見抜き、自分の代理として外科科長にすえ、チューリッヒ大学の精神医学・精神療法の講師に任命されるように奔走した。さらに重要なことは、ゴールトンの言語連想テストに取り組ませたことである。その研究によってユングは、心理学の世界で著名になり、フロイトの知遇も得ることになった。

1906年、ユングは、彼と弟子の貴重な研究を集めた『診断学的理想研究』を出版した。ユングは、これをフ

ロイトに送ったが、後述のようにフロイトは、なるべく早く読みたくて、自分で買い求めた。これがきっかけとなり、それから約7年間にわたって、ふたりの間に文通が続いた。

1907年2月27日(日曜)朝10時、ユングは、フロイトをウイーンに訪問した。ユングはフロイトに語り、質問したいことが山ほどあり、3時間、ぶっとうしてしゃべった。そこまで忍耐強く、耳を傾けていたフロイトは言葉をはさみ、もうすこし組織的に議論しようと提案した⁷⁾。

ユングはフロイトに同輩の研究者としてではなくて、師として、また、「父」としての交際をもとめた。「父親と息子としてお付き合いさせてください」とユングは書いている。当時、52歳で、後継者をさがしていたフロイトは、ユングを自分の学問の後継者とみなした。そして「跡取り息子」、「皇太子」と呼んだ。この後、1913年のはじめに袂をわかつまで、ふたりの親密な交際が、おもに書簡によって続いた。

1907年、ユングは『早発性痴呆の心理学』を刊行し、精神医学者としての名声をさらに高め、フロイトの高弟として、名をあげつつあった。1904年以降、ユングは、フロイトの考えを種々の方面に応用した。

3 フロイトとユングの往復書簡に現れたグロース

有名なフロイトとユングの往復書簡のなかにグロースが登場する。ユングとフロイトの往復書簡は、精神医学についての知見のみならず、新しい学問にたいする情熱があふれている貴重な書簡であるが、そのなかに、グロースに関する言及がかなり多く見られる。

『往復書簡集』を見ると、1906年4月11日付けの、フロイトのユングあて書簡が一番はやい。これは、ユングが、自著『診断学的連想研究』(1906)をフロイトに贈呈したときの礼状である。これによると、贈呈を待ち切れず、すでに買い求めたとある。この年の6月、フロイトは、ウイーン大学の法理学ゼミナール「犯罪構成事実の診断と精神分析」において、ユングの名前をあげてその業績を評価した。

1907年6月28日、ユングのフロイトあて書簡

これが、この書簡集ではグロースについての最初の言及であるが、1904年ころから、フロイトは、グロースを知っていた。

いずれあなたもオットー・グロースの著作に目を通される機会をお持ちになるとと思いますが、あなたがウェルニッケの体系の未完の伽藍ではたらく石工にすぎないという彼の批評には全然同調できません。とはいえこれまでの意見の趨勢のいっさいが、あなためがけて収斂しているとの論旨は人をして納得させるものがあります。グロースの本に見られるあらゆる種類の風変わりな論旨をひとまず脇におくと、ほんとうの彼は抜群の理解力の持ち主と申せましょう。是非ともあなたのご意見をお聞かせ願いたく存じます。

ここで言及されている著書は、『フロイトの観念発生契機とクレペリンの躁鬱性精神異常における意義』(ライプツヒ、1907年)である。ユングは、『心理学的類型』(1921年刊全集6巻)の1章をさいてグロースがその著『大脳の二次機能』(ライプツヒ、1902年)と、『精神病質の劣性について』(ウイーン、ライプツヒ、1909年)をとりあげている。

1907年7月1日、フロイトのユングあて書簡

グロースの本についてとりわけ私の興味を惹くのは、それが法王庁直属の診療所から出でているものなのか、それとも少なくともその許可を得て発表されたものなのかという点であります。グロースは知性溢れる人物ではありますが、わたしの好みから申しあげるならかれの著作は観察過小を埋めるに理論過剰をもってしています。

「理論過多」と「観察過小」はグロースの学問の本質をついた評である。

1907年9月11日、ユングのフロイトあて書簡

アムステルダムで、9月2日から7日にかけて開かれた国際神経・精神医学会の様子を、ユングは、フロイトに報じている。

これに先立って心理学の分科会において、グラーツのグロースが二次機能に限定してあなたの学説の意義を詳細に論じたのにならって、チューリッヒのフランクがあなたを精力的に擁護いたしました。グロースがあまりに神経過敏になっているのがいかにも残念でしたが、頭脳はきわめて明晰でありその「二次機能」によ

り心理学者たちに多大の感銘をあたえておりました。彼と長時間話しあってみて、かれがあなたの思想の熱烈な支持者であるのを知りました。

1907年9月25日、ユングのフロイトあて書簡。

これはアムステルダムでの学会での、グロースとの議論に基づいている。

グロース博士の語ったところによると、医師にたいする感情転移は人びとを性にかんして不道徳家にしてしまうからただちに中断するとの由です。分析家にたいする感情転移とその永続的な固着は、一夫一婦志向の象徴にすぎず、それだけで、抑圧形成の象徴として症状を形成し、かくて、神経症患者にとってことばの正しい意味での健康状態とは性的不道徳を意味する結果となり、こうしてかれはあなたとニーチェを結びつけてしまうというのが主たる理由となっております。しかしながらわたしには、性的抑圧がよしんば多くの病弱な人びとの発病をうながすものであれ、きわめて重大かつ不可欠な文化促進要素であるように思われますし、その反面に有害な点が秘められているにせよ、それはいつでも造物主のつくられたごく些細な瑕疵にすぎないと思われるのです。そうとでも考えなければ、文化とは逆境とたたかって獲り得た成果以外のいかなる意味も持ち得ないのではないのでしょうか。グロースは、才気溢れるとはいえ、また風雅ともいえない批判的でそれゆえ文化を生じせしめる契機をもたない、性的な短絡を学んだため、時代風潮から離れすぎた深みに落ちているようにわたしには思われました。

ユングは、一夫一婦制度を否定し、男女の自由な性的関係を主張するグロースの思想を批判する。しかし、翌年には、グロースの影響を受けて、ユング自身が、一夫一婦制度を否定するに至る⁸⁾。

1908年2月25日、フロイトのユングあて書簡

パラノイアについてのご所見、わたしの琴線に触れました。不幸にしてオットー・グロースの健康状態はかんばしくないようですが、かれをのぞくとあなたこそは、独創的な思索をすすめる当代の第一人者と申せましょう。近い将来、パラノイアについてわたしの夢想している問題を御報告する所存であります、それは

あなたのお考えになっている問題と一部、合致いたします。

フロイトがグロースを、ユングと並んで、「独創的な思索をする者」を評価していることが分かる。しかし、グロースのコカイン、モルヒネ中毒状態がひどく、父のハンスが禁断治療をさせたいと考え、関係の人々に連絡をとりはじめた。そのことはハンスの手紙に現れている。

1908年3月31日、父ハンスは、ブルクヘルツリ病院院長、プロイラーに入院させてくれという依頼の手紙を書いている。

たった今、わたくしは、プラーグを経由して、あなたの親切なお手紙を受け取りました。それにたいしていくら感謝してもしきれません。この上なく緊張して、あなたの決定を待っていました。あわれな息子があなたに受け入れてもらえるかと。

このことについて息子がどういう態度をとるか、目下のところ私たちには分かりません。私たちは、駅馬車が着くたびに、嫁の到着を待っています。息子が進んで入院する気持ちになっているかと⁹⁾。

父のハンスは、禁断治療によって、オットーのモルヒネ中毒を直したく、ブルクヘルツリ病院へ再度の入院を希望し、プロイラーからは入院を受けられるという返事をもたらしたが、オットー本人が本当に入院する気持ちであるか、確認できないのである。

4月4日に、ふたたび、ハンスは院長あてに手紙を書いている。

嫁がたった今、私に手紙を寄越したところでは、事態はこうなのです。息子は病院に来るのは、ただ治療だけであって、禁断隔離のためではないと明言しているのです。一度だけでよいから、ブルクヘルツリに來させることにすべてはかかってっているのです。そう行かない場合はすべて絶望的です¹⁰⁾。

1908年4月19日、フロイトのユングあて書簡

ここでせめて肩のこらない話題を取り上げる一划をもちたいと思います。オットー・グロースについてなのですが、何とも気の毒な話であります、この有能で意志強固な人物がいまあなたの医療による救いを

早急に必要としています。コカインに溺れ、察するに中毒性コカイン・パラノイアの初期症状を呈しています。かれの奥さんは、わたしが好感を抱いている数少ないゲルマン系の女性の一人であります。そのかの女に深い同情を禁じ得ないものがあります。

フロイトは多忙なため、ユングに治療を委嘱している。

1908年4月24日、ユングのフロイトあて書簡

一つだけとても気がかりな問題がございます。それはグロースにかかわる事件であります。かれの父上から速達便をもらって、それによりますとかれをチューリッヒにつれもどして欲しいとの由であります。不運にしてわたしは来る四月二十八日に、縁戚につながる建築家とミュンヘンにて急を要する用件が待ちうけております。そうこうするうちにグロースがわたしから逃げだしてしまいます。遺憾ながらブロイラーはかれの信頼をかちとっていないためか、手を焼いているようです。グロースはいまではコカインだけでは足りずにアヘンの危険量まで服用しています。

1908年5月6日、フロイトのユングあて書簡。

オッター・グロースの証明書、同封しました。いったんかれを引き受けられると、わたしがかれを受け持てるようになる10月まで、かれを手離せなくなるであります。

フロイトが同封した、グロースの入院命令証明は次のようなものである。

私は次のことを証明します。数年来、私の個人的な知り合いであったグロース博士は、神経病理学の私講師であるが、非公開の施設に入院することが、緊急に必要なになっている。医師の監督のもとで、アヘンと、コカインの禁断を実行するためであり、その麻薬を、本人は、最近、精神的と同様に、肉体に害のあるやりかたで、服用しているのです。

こういう経過をたどって、ユングはブルクヘルツリ病院でのグロースの治療を引き受けることになった。父、ハンスは、院長に手紙を送り、こう書いている。

息子が何かのためお金を必要とするならば、お願いで

す。私たちに知らせてください。そのときあなたに、お金をお送りします。オッターは生まれてからこのかた、お金の使い方を知らないのです。だれかにくれと言われると与えてしまうのです。金については息子は子供同然なのです¹¹⁾。

1908年5月11日に、グロースは、麻薬中毒の治療をうけるため、ブルクヘルツリ精神病院に入院した。その治療をユングが担当した。ユングによる、この診察の記録が残っているので具体的にみる事ができる。

5月18日、1週間の治療を終えたあと、ユングはこう報告する。今まで、アヘンは1日、最高6グラムに押さえられている。最初の夜、明かりを全然つけてはならぬと言われて、患者は、大騒ぎをした。すぐ出ていく、監禁されたといった。毎日、分析は続いた。

5月23日の記録では、アヘンの量が、1日3グラムに下がったとしている。それにもかかわらず、「禁断症状は起こらない」という。

5月28日には、アヘンはまったく絶ったとする。ユングのフロイトあての書簡では、グロースが、自発的に、アヘンを減らすことに同意しているとしている。

6月17日まで、治療が続き、麻薬の量を減らすのに成功したのであるが、最後は、グロースは、塀を乗り越えて逃亡した。

1908年5月29日 フロイトのユングあて書簡

グロースがそれほどまでにすぐれた精神を持った類い希な人物である以上、あなたのお仕事もその分だけ社会にたいして貢献したわけで、その御労力たるや少しも惜しいものではございません。 (中略) なおわたしは、その相手をすれば大目的の本質にじかに触れてしまうにちがいないような、グロースのような患者をこれまで手がけた経験はございませんでした。

1908年6月19日づけ、ユングのフロイトあて書簡

この手紙にはユングのグロースにたいする畏敬の念が表現されている。

ようやくにして注意をお手紙に集中できるくつろぎの時間をとりもどしました。これまでグロースの件に文字通りかかりきりでありました。日夜を問わず時間のいっさいをかれに割いて分析を行った結果、かれは

いっさいの薬物を自由意志で放棄いたしました。この3週間来、ごく幼児期の素材だけをひたすら調査しているうちに、わたしは実感として少しずつ憂鬱になってまいりました。それと申しますのも、どれほど幼児期のコンプレックスが洗いざらい記述され把握されようとも、また患者からそのコンプレックスを識別し、一時的にそれを現実化してみせようとも、圧倒的、すなわち執拗に固着をつけ、その情動を汲んでも汲みつくせない深層からひきよせているからなのです。洞察や感情移入の努力をはかるといったわたしどもの途方もない努力の果てに、一瞬漏れ口は開いてしまって、心からの感情移入のあらゆる機会は向背になに一つとして痕跡をとどめず、たちまちのうちに実態のない幻しの記憶と化してしまうのでした。かれには成長というものも心理学的過去というものもなく、幼児期に起こったさまざまな事件が永遠の現在としてはたらいっているため、どんなに時間を割いて分析を加えても、現在の事件にたいして六歳児同然の反応しかしめず、妻はいつも母がわりにすぎず、かれに善意もしくは悪意を抱くいかなる友人、いかなる人間も父がわりであって、この世は途方もない可能性につつまれた幼児的空想〔思考の万能〕の世界なのです。

以上の報告から、あなたはすでに〔わたしの〕診断を読みとられたのではないかと案じております。わたしは長いあいだそう信じまいと努めてまいりましたが、いま眼前に展開するこの光景を明鏡止水の心境にて「早発性痴呆症」と命名したいと思います。

この診断はかれの奥さんの綿密な記憶と、部分的には精神分析にたよって、文句なく確認されました。診断はこの舞台からの退場と正確に対応していて、一昨日グロースは、一瞬の不注意の隙をついて石垣をめぐらした庭づたいに逃亡してしまいました。運命の黄昏に向かって、ほどなくかれがミュンヘンに出現するのは疑う余地がないでしょう。

なにはともあれかれは、ほんとうに類い稀なる心性を有した善良にして高潔な人柄であるのですから、いまだにわたしのこよなき友なのです。いまかれはわたしによる治療が寛解に終わったのだという妄想のもとにあって、あたかも籠から抜けだした小鳥のように感謝に溢れた手紙を送ってきてくれました。陶酔に浸っているため、これまでいささかも意識しなかった現実が、かれに復讐を加えるかもしれないなどは露ほど

も予感しておりません。かれは人生の失格者の烙印を貼らざるを得ない一人の人間なのでから、長期にわたって他者と生活をともにするのが困難なのでありましょう。かれの奥さんにとって唯一の救いとなっているのは、グロースが彼女にたいして、この女の神経症の病症利得を演じているのだと錯覚している点であります。いまのわたしにはかの女の立場もわかっておりますが、それだからといってかの女を無罪放免するわけにはまいりません。

以上、委細を御報告申しあげました結果として、あなたがどのような御感想を抱かれるものかわたしには想像いたしかねます。少なくともわたしにとりましては、今回の体験が生涯を通じてのもっとも忘れ難い経験の一つとなりました。それというのもグロースのなかにわたし自身の本質を多々みとめたからであり、それゆえでありましょうか、早発性痴呆をのぞくならばわたしの双生児の弟のようにすら思えるときもあったからであります。これは悲劇にすぎました。かれを治療するにあたってわたしがどれほどの力を振りしぼらねばならなかったか、あなたには容易に御推測いただけるものと思います。しかしそれにもへこたれないでこの体験を手離さなかったのは、たまたまこの一つの比類なき人格という手がかりを得て、早発性痴呆の最深の本質にあるいは手がとどくかも知れない比類なき洞察をあたえてくれたためだと思われまふ。(後略)

この書簡の長さ、内容の熱心さから、ユングがいかにかグロースの治療に打ちこんでいたかが分かる。「双生児の弟」という表現から、いかに、グロースに共感を感じていたかがわかる。彼から思想的影響をうけたこともよくわかる。この治療の過程で、一夫一婦制の否定の思想をグロースからユングは受けたと指摘されている。それも否定できないであろう。

1908年6月21日、フロイトのユングあて書簡
前のユングの書簡にたいする返事である。ユングの書簡に答えて全力で対応している。

(前略)

それに治療不能や悪化は早発性痴呆では規則通りにやってこないし、かつまたヒステリーや強迫神経症から選別する力もないからです。しかしわたしはその事態を、

わたしにはにがい経験があるのでよく知っているのですが、中毒性パラノイアを招来する薬物、とくにコカインに原因があるのではないかと思いたいです。それはそうとして、あなたの早発性痴呆にかんする深い御造詣ゆえにあなたのご診断に疑義をさしはさむ理由はもとより毛頭ございませんが、しかしながらまたそれに併せて早発性痴呆がしばしば究極的なきめ手となる診断とはならないという理由のもとに疑義をさしはさまないわけにはまいりません。(後略)

フロイトは、「早発性痴呆症」というユングの診断に疑問をもち、コカイン中毒に原因する「パラノイア」ではないかと言っている。

1908年6月26日 ユングのフロイトあて書簡

グロースの件につきまして新しい局面を迎えました。グロース教授夫人からわたしの上司に宛てた最近の報告によりますと、グロースは真正のパラノイアの態度を示しております。たとえば、チューリッヒでホテルで居たたまれなくなったのは、上の階の住人たちがかれの精神状態を密かに観察している(!)のに気づいたからであり、またミュンヘンのかれの住居では、「あの医者は家にいるのか?」と大声でたずねる町の声を耳にしたからである、と訴えております。また四囲の壁や上の階でコツコツ叩いているのが聴えるといっしょく妻を悩ませています。この不幸な妻は、おそらく早晩、人格崩壊を惹き起こすのではないのでしょうか。なぜならかの女はその感嘆すべき長所にもかかわらず、理由を聞かないで傷みを感じる方を択んでいるからであります。あきらかにかの女は、この症状行為とかの女の全運命をむすびつけようと願っているようです。

ともかくもこれから先もこの問題をあつかえるのであれば、また他日、あなたを訪問させていただきたく存じます。そうする以外にしこりとなっている早発性痴呆、もしくは精神分裂病、もしくはパラノイア概念を論じる余地はわたしにはないからであります。なぜかと申しますと、私見によりますと父にたいする否定的感情転移ではなにごとくも説明されないからであります。その理由は一、グロースの症例では、絶対ではなかったからであり、二、早発性痴呆の他の多くの症例では、ヒステリーの症例と同様正反対であったからであります。(後略)

グロースの診断については、フロイトのパラノイア説とユングの早発性痴呆説の間にずれがある。ここに現れている症状は、「追跡妄想」の例であろう。いずれにしろ、グロースの中毒症状の重大さが読みとれる。

4 フリーダへの恋文

グロースは、1903年、フリーダ・シュロッファーと結婚した。結婚によって、女遊びと麻薬常習が収まることを父は期待した。男児が出生し、ペーターと名付けられた。しかし、彼の女遊びも麻薬常習もおさまらなかつた。エルゼ・ヤッフエと関係をもち、1907年に男児を生ませた。正妻の子と同じく、ペーターという名前がつけられた。

エルゼは、妻の学校友達であり、その関係で、グロースと知ることになった。エルゼの妹が、当時、ノッティンガム大学教授、ウイークリーと結婚していたフリーダである。

1907年の春、姉を訪ねてミュンヘンに来たフリーダは、姉によって、グロースを紹介され、その魅力にとりつかれ、愛し、肉体関係をもった。グロースは、ノッティンガムに帰るフリーダを、一緒に連絡船に乗ってイギリスまで送った。そのあと、姉の夫、ヤッフエの名前を借りて、恋文を送った。フリーダは読後焼却すると約束したにもかかわらず、その熱烈な恋文を焼却するのにしなかった。その結果、現在、16通を読むことができる¹²⁾。

日時がなく、順序ははっきりしないが、*Lawrence Review*, Vol.22, No. 2 に掲載されている順序では最初は次のものである。

A グロースからフリーダへ

きみが存在してくれてありがたい。きみのことが分かって、きみはぼくに勇気を、すべての希望を、すべての力を与えてくれたことを感謝する。……きみを通して、実体のない夢だったもの、ぼくの苦悶と希求のなかの夢想であったも……私の想像力のなかだけに生きていた「未来の女性」の夢を、「彩色し生命を与えて」ぼくに示し、与えてくれたのだ。これまで、可能性であるにすぎなかったもの、肉体にやどるとは、ほとんど期待しなかったものを、ぼくは現実に見て、愛したのです。

(中略)

エルゼがやってきた。美しい……

(ここでぼくは書きながら寝入ってしまった。次は数日後です)

今、ぼくはエルゼいっしょにいます。愛は深く、憂鬱も深い、これまでにないように彼女を愛するようになった。これまでにないように、ぼくは、彼女のまじめさを理解した。彼女は偉大で高貴で、あなたをあたたく、真剣に愛しています。嫉妬はまったくありません。でも彼女は苦しんでいる。二人、あなたが愛する二人の人の明るい幸福に、どのような苦しみの原因がありうるのだろうか。ぼくには、それが理解できない。つまり、ぼくはエルゼを彼女自身のコンテキスト、つまり、彼女の内部と周囲にある光りのない生活のなかでエルゼを理解するのです。彼女の生涯、彼女は、踏みにじられ、光りを奪われてきたのです。「上流階級の禁欲主義」というものです。長い間、彼女は、他人の苦しみをわかっことに充足を見だしてきたのです。たぶん彼女は、その喜びにもあずかることを知るべきなのです。彼女は、真に最善のものは、高貴さと、日光のなかで栄えることをほとんど知らないのです。

愛する人よ、現代は、あなたがぼくに与えたお守りをぼくが必要とする時代なのです。愛する人よ、あなたのなかで、未来のぼくの夢が、すでに実現し、ぼくの倫理的な理想が、現実として、すでに確認されたことを知ることで、ぼくが力と自身をとりもどさねばならない時代なのです。聖書にどう書かれているか、あなたはご存じですか。奴隷としてエジプトにいたものは、約束の地に入ることが許されなかったのです。彼らがすべて荒野で死に絶えて、新しい世代が生まれたとき、荒野の放浪のなかで、惨めではあるが自由に生まれたときはじめて、この新しい世代が、約束の地にきたのです。そして、そこで、勝利と支配を得たのです。それはすばらしい象徴です。というのは、このこと、すなわち、このような力ある自由、このような美しい自然な安らぎの高貴さには、古い鎖につながれていたものは、達することができないのです。モーゼも、解放者その人でさえも達することはできないのです。放浪の自由のなかに生まれたもののみが、自由が、犠牲や、厳格な法律そのもののように身近なものになっている探求者だけが、探求のすべての危険、勝利

の不確かな戦い、日々の戦いを知る者のみが、すべての悲しみを知ってはいるが、鎖につながれた経験をもたない者のみが、この新しい世代のみが、彼らの支配を打ち立て、自由な美しさのある確信にみちた貴族制をうちたてることのできるのです。

愛する人よ、さようなら。ぼくの感謝をうけとってください。すぐに、これからすぐに、こういうことについて、もっと書きます。ぼくがあなたに約束したものを送ります。あなたも、あなたとあなたの生活について、書いてください。お宅の状況を詳しく書いてください。あなたが黄金の幸福の種をまいているかどうか教えてください。あなたを愛する人にあなたの黄金の幸福が反映されるように。では、また、会いましょう。ぼくをすこしばかり愛しつづけてください。ぼくは、感謝しながら、喜びあふれて、あなたを愛します。

フリーダへのラブレターであるのかかわらず、姉のエルゼが登場する。これは意図的というよりも、グロースにはそういう意識がないのである。彼は、妻を愛し、エルゼを愛し、フリーダを同時に愛することができると考えているわけである。嫉妬という感情は起らないと思っている。

B グロースよりフリーダへ

あなたについて心配しています。お願いします。数語でよいからお手紙をください。お心づかいいただけるなら、電報がよいのです。しかし、お願いします。そこからあなたのお気持ちがわかるようなものがほしいのです。いいですね。あなたの愛情について心配しているわけではありません。連絡船上でのあの夜以来、不安はもはや、入る余地はありません。ぼくは、あなたご自身について心配しているのです。あなたの、未来に直面する勇氣について心配しているのです。あなたの力が、お宅でのすべてのものにゆっくりと積もる、窒息させるようなくだらなさ、灰色の生活を乗り切るほどになっているかが心配なのです。ぼくには分かっています。これらの環境は、あなたにはまったくそぐはない有害な環境なのです。真に自由で誇りたかい動物は、檻に閉じ込められることに我慢ならないのと同じなのです。ぼくは、あなたの抵抗する力、十全である力について心配しているのです。まさに、あなたのすばらしい性質を殺さないためなのです。まさにあなた

たは、自由になるために生まれたからです。ただ自由であるために生まれたからです。まさに、このために、あなたのことが心配なのです。この異質の、ぼくたちにとっては、永遠に有り得べからざる世界で、あなたがどうになってしまうのか心配なのです。すぐに返事ください。テュルケンシュトラーセ81番地か、カフェ・ステファニに。できれば電報で。強く自由でいてください。くじけてはなりません。助けはかならず来ます。

テュルケンシュトラーセはグロースの居宅。カフェ・ステファニは、グロースたちがたむろしていたカフェである。「自由」ということが繰り返しかわかれるが、一夫一婦制のような慣習に束縛されないということの意味している。また、家出をすることをすすめている。

すでに言及したが、1907年9月に、アムステルダムで、国際神経・精神医学会があり、そこでグロースは研究発表をしたが、その機会に、フリーダが、そこで来ることをグロースは期待した。しかし、フリーダは来なかったようである。夫のもとを離れて、ミュンヘンで同棲することをグロースが望んだがそうならなかった。麻薬中毒のグロースとは、安定した生活ができないとフリーダは思ったのだ。

ひとりの子をもうけたが、姉のエルゼもグロースから離れた。そのあとグロースは若い女性の画家で、精神科の患者のゾフィー・ベンツと1年間同棲したが、ゾフィーは自殺した。そのあと、グロースは、妻を、スイスの画家でアナキストである、エルンスト・フリックにひきあわせた。妻とフリックは、1909年から同棲して、妻は3人の子供を生んだ。

常識的には考えられないことであるが、これがグロースの常識であった。彼は、一夫一婦制こそが、精神障害を起こすと考えていた。

グロースはフリーダを愛したが、また、フロイトのエディプス・コンプレックス学説も教えた。これが、ロレンスに伝わり、『息子と恋人』をまとめるときに役に立った¹³⁾。

5 社会体制批判

第1期の脳精神医学者、第2期の精神分析家について、第3期は、グロースは、社会の体制批判の論文を書き始めた。次の彼の論文を見ればあきらかなのであるが、精神障害は、脳の器質の障害の問題でなく、また、個人の

内面だけではなくて、社会の体制が、個人の自由を束縛し、抑圧する結果として、障害がおこるとする。だから、抑圧のない社会をつくるのが、最終の目標になる。

1913年、グロースはベルリンに出て、雑誌『アクション』のグループに属した。「文化の危機」という論文を発表している。

無意識心理学は革命の哲学である。それは、精神の内部の革命の発酵となり、生得の無意識によって束縛されている個性を解放する使命がある。内部の解放を可能にし、革命の準備をすることを使命にしている¹⁴⁾。

これにたいして、批評家のルドウィッヒ・ルビナーは「医者は病院を出るな」という趣旨の批判をする¹⁵⁾。それにたいして、グロースはこう答える。

私は、次のことを示すことをライフワークにしています。現在の権威的な体制の直接的な結果として、どんな人間も患者になるのです。しかも、とりわけ、自分のもっている価値の結果、高い価値をもっている人がとくにひどいのです。これを知ることが、人間の健全さの必然性としての革命の要求なのであり、臨床の下準備として、革命的人間の内面的解放です。それは、基礎としての生命にたいする、個人の権利の主張と一致するのです。そして、それは、生得の個人のすべての可能性の展開なのです。

無意識心理学は、個人の現実を理想の姿を、おしのけられ、潜在した状態から、明るみに出すことに成功したが、それによって、未来の「健全」を規定することができるのです。

結 語

グロースは精神医から、社会体制批判に移って行くが、そこには、ロレンスとのかなりの類似が見られる。ロレンスも、フリーダと同棲をはじめた約半年後の、1913年1月にこう述べている。「私の偉大な宗教は、知性より賢明な、血と肉体の信仰です。私たちは精神においては間違いをおかします。しかし、血で感じ、信じ、述べることは、つねに正しいのです」ここには、あたらしい思想を展開しようとする意気込みが感じられる。現在の社会の体制に束縛されない生き方をもとめている。

ロレンスは、グロースを直接は知らないし、その思想

が同じだというわけではないのだが、あたらしい世界を切り開こうとするところでは二人には共通点がある。フリーダには、グロスとロレンスは同じタイプの人間に見えたのであろう。革新的な思想をもち、理想に向かって勇敢に進むところは同じように魅力であった。フリーダが、ロレンスを「グロスの再来」と言ったのは、おそらく正直な気持ちであろう。フリーダは1907年の時点で実行をためらった家出を、1912年の時点で、実行したのである。

注

- 1) オットー・グロスについては、これまでもすでに発表してきた。拙著『D.H.ロレンス 小説の研究』（荒竹出版、1976）、『D.H.ロレンス 愛の予言者』（冬樹社、1978）、『D.H.ロレンス』（清水書院、1987）、「D.H.ロレンスとオットー・グロス——(Twilight in Italy)の問題——」（『東京学芸大学紀要』第2部、38集、1987）、「D.H.ロレンスのドイツ体験」（『東京家政大学紀要』36集、1996）、「フリーダ・ロレンスとオットー・グロス」（『英語英文学研究』（東京家政大学英語英文学会）第4号、1998）などで、すでに触れた。本論は、それらと、できるだけ重複を避けて、グロスの新しい面を考えるものである。
- 2) Hurwitz: *Otto Gross*, p.60.
- 3) 松下正明、広瀬徹也編『精神医学』（南山堂、1998）、4～12頁）参照。
- 4) 同上。
- 5) アーネスト・ジョーンズ『フロイトの生涯』154頁。
- 6) 同上、255～6頁。
- 7) 同上、257頁。
- 8) Richard Noll: *The Aryan Christ*, p.84.
- 9) Hurwitz: *Otto Gross*, p.134.
- 10) Ibid., p.134.
- 11) Ibid., p.218.
- 12) この手紙のオリジナルは、マサチューセッツ州のタフツ大学にある。エルゼは死の床で伝記作者のマーティン・グリーンをドイツに呼んでグロスのフリーダあての手紙を渡した。（Noll: *The Aryan Christ*, p. 299）
- 13) Frieda Lawrence: *Not I But the Wind*, p.3.
- 14) Hurwitz: *Otto Gross*, p.90.
- 15) Ibid., p.100.

主要参考文献

- Jannet Byrne: *A Genius for Living: A Biography of Frieda Lawrence*. Bloomsbury, 1996.
- Richard Noll: *The Aryan Christ*. Random House, 1997.
- : *The Jung Cult: Origins of a Charismatic Movement*. Fontana Press, 1995.
- Emanuel Hurwitz: *Otto Gross: Paradies-Sucher zwischen Freud und Jung*. Suhrkamp Verlag, 1979.
- Frieda Lawrence: *Not I But the Wind*. 1934.
- Frieda Lawrence: *The Memoirs*. Heinemann, 1961.
- The D,H, Lawrence Review*. Vol.22, No.2. 1990.
- Martin Green: *The von Richthofen Sisters: The Triumph and the Tragic Mode of Love*. Basic Books, 1974.
- Edward Nehls: *D.H Lawrence: A Composite Biography*, Vol. I. The University of Wisconsin Press, 1957.
- Robert Lucas: *Frieda Lawrence: The Story of Frieda von Richthofen and D.H. Lawrence*. Secker & Warburg, 1973. (ロバー・ルーカス(奥村訳)『チャタレー夫人の原像』講談社、
- W. マグァイア編(平田訳)『フロイド/ユング往復書簡』誠信書房、1980年。
- アーネスト・ジョーンズ(竹友・藤井訳)『フロイトの生涯』紀伊国屋書店、1982。
- バーバラ・ハナー(後藤、鳥山訳)『評伝 ユング』人文書院、1987。
- C. G. ユング (林訳)『タイプ論』みすず書房、1994。

Summary

A Biography of Otto Gross: Part I

The Relation with Freud, Jung, Frieda Lawrence

Otto Gross is not only one of the influential disciples of Sigmund Freud but also plays an important part in the development of D.H.Lawrence's ideas. This essay is an attempt to make clear the relation of this German psychoanalyst and Freud, Jung and Frieda Lawrence and to trace the origins of Lawrence's ideas back to the German mind.